

日本で発見されたオリヤー語の『マハーバーラタ』 について

Shobha Rani DASH

はじめに：約 400 年前に書かれたインド東部オリッサ州の貝葉写本が、日本の愛媛県津島町に江戸時代中期（18 世紀）ごろから伝えられていると言われている。津島町社会教育課からの依頼により大谷大学名誉教授長崎法潤博士を中心にして龍谷大学非常勤講師柏原信行氏及び筆者も参加して 2001 年より本格的な調査が始まった。その後、当貝葉を「津島貝葉」と名付けて、ローマ字校訂と和訳の作業を続けている。2001 年にはオリッサ州での現地調査も行つて、専門家の方々よりオリッサ地区の貝葉写本に関する貴重な指導も受けた。

津島貝葉の紹介：津島貝葉の推測書写年代は 17 世紀の初めとされる。これは中世オリヤー文字を使用して中世オリヤー語で書かれている。221 葉（両面記載）からなるこの写本は、15 世紀半ばのオリッサ州の有名な詩人サーララーダーサによって書かれた『マハーバーラタ』¹⁾の「森林章」の第 1 部である。なぜならば、貝葉の初めの行に“śrīmahābhārata āraṇyaka parba prathama khaṇḍa lekhaṇa”すなわち『マハーバーラタ』の「森林章」の第 1 部と記してあり、最後（221-b 葉）に“śrī aranyaka parba prathama khaṇḍa sampūrṇa”すなわち「森林章」の第 1 部の完成と書かれていることからである。内容的にも間違いなく叙事詩『マハーバーラタ』の「森林章」の第 1 部であることが明らかである。オリヤー文学、特に中世期のオリヤー詩には、バニター（bhaṇitā）と言われる語り手の名前を文中や文後に挿入することが伝統的に記されている。当貝葉にも文中に何回もサーララーダーサが語り手であると示されている。これらのことから、津島貝葉がサーララーダーサによって書かれたオリヤー語の最も有名な『マハーバーラタ』の写本であることが明白である。

詩人サーララーダーサの人生の歩みは明確に知られていないが、15 世紀半ばごろに『マハーバーラタ』を書き始めていたことが知られている²⁾。本名はシッデシュアル・パリダーであった。彼はシュードラカーストの人であつて、聖者のような人物であつたため「シュードラムニ」と呼ばれた。正式の教育を受けたこと

(242) 日本で発見されたオリヤー語の『マハーバーラタ』について (Shobha Rani DASH)

がなく、サンスクリット語もできなかったようであるが、サラスワティー女神の恩恵によって詩才が身についたと伝えられている。このことは、津島貝葉及び彼の多くの作品に述べられている。故に、彼は自分のことを「サーララダーサ」つまりサラスワティー女神の僕（しもべ）と呼んでいる。

調査によると、オリヤー語やオリヤー文字の貝葉が日本で発見されたのは、当貝葉が最初のものである。

津島貝葉の詳細情報一覧：(1) 標題：Mahābhārata, Āraṇyaka-parba, prathamakhaṇḍa, (2) 著者：Śūdrāmuni Śrisāraḷādāsa, (3) 書写年代：17世紀初め, (4) 書写地：インド東部・オリッサ州, (5) 使用語：中世オリヤー語, (6) 使用文字：中世オリヤー文字, (7) 数量：221 葉 (両面記載), (8) 寸法 (横×縦)：46.4 × 2.7~3.8cm, (9) 綴穴位置：中央一個, (10) 保存状態：やや良好, (11) 記入行数：各葉の代表的行数は4行, (12) 記入寸法：各葉記載面の代表的寸法 (横×縦) 41~41.5 × 1.8~2.3cm, (13) 文字密度：10cm 内での平均的記入密度は20~25文字, (14) 奥付：無し, (15) 備考：(i) 竹の夾板がついている, (ii) 最初と最後に文字記入されていない数枚の葉がある, (iii) サーララダーサによって書かれた『マハーバーラタ』全体の10分の1程度。

津島貝葉の内容：当貝葉はガネシャ神への祈願文から始まる。物語はアガスティ聖者が語り手となってパイバスタ・マヌ王の質問に次々と答えて行く構成となっている。最初の物語はパンダバ兄弟が従兄のカウラバ兄弟とサイコロの試合をするところから始まる。その結果、パンダバ兄弟が負けて罰として13年間森へ行って生活することが中心の話題である。その間にあった様々な出来事が詳細に描かれる。例えば、パルシュラーマの誕生と彼の両親への深い愛情の話、アルジュナの息子アビマニュの誕生の話、ナフシャ王がインドラになった後蛇にされた話、カルナ王とハリシュチャンドラ王の誓いの話、ヒラナ・カパチャ鬼によるジュディスティラの誘拐、アルジュナによるヒラナ・カパチャ鬼の殺害、鶴に身を変えたダルマ神とジュディスティラの哲学的な討論、ビーマの息子バーレーララとカウラバ軍の戦い、ドラウパディーの五人の息子の誕生、カルナ王誕生の話、ガンガー女神 (ガンジス川) が地上に降りて来て人々を救った話、アルジュナによるニクンバ鬼の殺害など有名な出来事が述べられている。アルジュナによってこのニクンバ鬼の殺される話が当貝葉の最後の物語となっている。前述のように「第一部」と書かれていることから当貝葉はこれだけで完結しているものではなくて、恐らく続く第二部以降が存在していたと考えられる。[森林章]

の残りの話は当貝葉では欠けているが、恐らく第二部に記されているであろう。

津島貝葉の特徴：津島貝葉には幾つかの著しい特徴が見られる。①当貝葉は平均 46cm 余りの長さにも関わらず中心に一つだけの綴穴がある。②一葉あたり 3 行～5 行の行数が見えるが、最も多い行数は 4 行である。③各葉の左上にアラビア数字のオリヤー文字表記で貝葉写本の番号が記入されている。④文字の形や書き方が所々異なっているため、複数の人（少なくとも 3 人）によって書写されていると思われる。⑤全体的に標準語の中世オリヤー語（祈願文の部分はサンスクリット語）で書かれているが、文中に *gariā, kelāi, putā, murdhunā, araṣṭi, daladali* など西オリッサの方言も見られるので、書写した人の少なくとも一人が西オリッサ出身であったと考えられる。⑥津島貝葉に竹のカバー（夾板）が付されている。オリッサには竹のカバーと木製のカバー両方が見られるが、長期保存のために竹のカバーを木製に入れ替えることもよくある。⑦オリヤー語で出版されている『マハーバーラタ』には「*bana parba*」となっているが、津島貝葉のみがサンスクリット語の『マハーバーラタ』3) の表現と同じく「*āranyaka parba*」になっている。両方の語句は同じ意味を持っているが、表現が異なっている。⑧最も興味深いのは、登場人物や地名などがオリッサ独特のものである点である。例えば、『マハーバーラタ』の主人公の中の一人クリシュナ神はオリッサ州の最も有名なジャガンナータ神として表現されている。通常手足のない姿で表されるジャガンナータ神はクリシュナ神と同様にガルダ鳥を乗り物語中において全く同じ働きをするのである。そして、クリシュナ神は現在のウッタラ・プラデーシュ州のマトゥラー近辺で活躍していたとされているが、津島貝葉のクリシュナ神はオリッサ出身である。さらに、恐らく高く評価するためにか、彼はシュードラではなくバラモンとして描かれている。さらに、オリッサ独特の料理とオリッサ州の有名な川の名前も書かれている。

このような例が他にも数多く存在する。これらの特徴は、できる限り『マハーバーラタ』をオリッサの人々に馴染ませるためにオリッサの風習に基づいて書かれたために生じたものであろう。故に、これは『マハーバーラタ』の単なるオリヤー語訳ではなく、オリヤー版の『マハーバーラタ』になっている。

結び：『マハーバーラタ』は親族間に起こった戦争の話であるので、オリッサでは家庭でこれを読誦しない習慣がある。それはバーガバタ・トゥンギ (*bhāgabata tungi*) と呼ばれる聖典を唱える特別な場所でも読誦しない。それに比べ「森林章」は、道徳や哲学的な話、巡礼の話などが数多く含まれているため、よく読誦され

(244) 日本で発見されたオリヤー語の『マハーバーラタ』について (Shobha Rani DASH)

る。このことから津島貝葉の重要性を評価することができる。

津島貝葉がどのようなルートで日本に伝えられたかは不明であるが、オリッサから海路で伝えられた可能性が高い。オリッサ州の人々は昔から東南アジア、特にインドネシアのバリ島、スマトラ島、ジャワ島などと海路交易で活躍していて、文化的な影響も与えていたことが良く知られている⁴⁾。故に、津島貝葉はオリッサからインドネシアへ、そしてインドネシアから海路で日本に持ち出されたと推測される。そして、オリッサでは『マハーバーラタ』や『ラーマヤナ』を書写して嫁ぐ娘に嫁入り道具の一つとして贈るという風習があったので、このような方法で誰かによってオリッサから持ち出された可能性も無視することができない。

さらに、『日本書紀』や『日本霊異記』に記されている日本の最初の仏像造りの神話とオリッサの守り神ジャガンナータ神の神像造りの神話に、例えば、香りを発する大きな流木から王が神像を造る話など類似点が多いため、オリッサと日本は昔から何らかのかたちで関係を持っていたと言えるのではないであろうか⁵⁾。

津島貝葉の研究は、インド、特にオリッサ州と日本の文化との様々な関係の一面面を明らかにすると期待されている。

注：

- 1) 一般的には『サーララ・マハーバーラタ』として知られている。これに関して以下の二つの出版物がある。1. Dharma Grantha store(ed.) Cuttack, 1999-2000 ; 2. Dr. Arttaballabha Moranty (ed.), the Department of Culture, Government of Orissa, 1966.
- 2) Bhoi, D. N. & Bakshi, P. “Sarala Dasa, the Originator of the Oriya Literature”, *Orissa Review*, Bhubaneswar, 2004, p.57.
- 3) The Bhandarkar Oriental Research Institute によって出版された『マハーバーラタ』には「āraṇyaka parva」と表記されている。なお、オリヤー語に「va」の文字がなく、「va」に当る全ての文字が「ba」と表記される。
- 4) Patra, B., “Kalinga in South East Asia”, *Orissa Review*, 2004, p.15; Patel, C., “Oḍiśā o iṇḍonesiāra prācīna sāmśkr̥tika o bāñijyika samparka”, *Utkalā Prasāṅga*, 2004, p.10.
- 5) この点に関しては、拙論「Correspondences Between the Jagannātha Myth and Early Japanese Writings」『ジャイナ教研究』第8号、2002年、を参照。

〈キーワード〉 オリヤー語文献、貝葉写本、オリッサ (Orissa), Mahābhārata, Sāraḷādāsa
(日本学術振興会外国人特別研究員)

world to the end, the Jain cakravartins renounce worldly pleasures and enter nirvāṇa; the last (fourth) chapter of the *Hariseṇacariu* describes it in detail.

Some Jain Rāmāyaṇa texts contain the biography of Hariṣeṇa. To locate the *Hariseṇacariu* in the tradition of Jain Rāmāyaṇas, the story of Hariṣeṇa is comparable with the *Paumacariya*, the *Padmapurāṇa*, the *Paumacariu* and the *Triṣaṣṭiśalākāpuruṣacarita*. According to V. M. Kulkarni, the *Paumacariya* is the oldest and divided into three branches. Among them, the *Padmapurāṇa* resembles the *Hariseṇacariu* in plot. However, the *Paumacariu* simplifies Hariṣeṇa's story.

Although *Hariseṇacariu* has many rhetorical expressions and the *Triṣaṣṭiśalākāpuruṣacarita* abounds with them, these are different from each other both in plot and proper names.

We can conclude that the *Hariseṇacariu* belongs to the *Padmapurāṇa* branch, not derived from the *Paumacariu*, and that there is no direct connection with the *Triṣaṣṭiśalākāpuruṣacarita*.

157. A Study on the Oriya *Mahābhārata* Discovered in Japan

Shobha Rani DASH

A palm leaf manuscript of the Oriya *Mahābhārata* written by the famous Oriya poet Śūdrāmuni Śrīsāraḷādāsa of the mid 15th c. was transmitted to Tsusima-cho of Ehime prefecture in Japan during the 18th century A.D. It is assumed that the manuscript was transcribed in the beginning of the 17th c. It was written in the medieval Oriya language using the medieval Oriya script except the invocation to Lord Gaṇeśa, which is in Sanskrit. It consists of 221 leaves (transcribed on both sides), a few blank leaves and a bamboo cover. In the beginning and the end of the manuscript it mentions clearly that it is the first part of the *Āraṇyakaparba* of the *Mahābhārata*. It is a typical manuscript of Orissa, an Eastern state in India. The most interesting point to note is that it is not just an Oriya translation of the Sanskrit *Mahābhārata*, but is an Oriya version of it. Since 2001, I have been working on its romanized edition and Japanese translation along with Mr. Nobuyuki Kashiwahara and

Prof. Hojun Nagasaki as the chief. A new relationship between Orissa and Japan is expected to be explored from the research of this manuscript.

158. The Uses of *átas* and *átra* in the Maitrāyaṇī Saṃhitā

Kyoko AMANO

The Vedic pronominal adverbs *átas* and *átra* have often been assigned to the paradigm of *idám*, the pronoun of proximal deixis. It is not possible, however, always to understand them in the sense of ‘from here’ and ‘here’. The Vedic pronominal system is constituted by three pronouns of contextual reference (*sá-/tá*, *eṣá-/etá-*, *ena-/a-*) and two pronouns that refer to space (proximal *idám*, distal *adás*). The adverbs *tátas* and *tátra* belong to the paradigm of *sá-tá-*; *itás* and *iha* to that of *idám*; *amútas* and *amútra* to that of *adás*. But *eṣá-/etá-* and *ena-/a-* are without formally corresponding ablative and locative adverbs. On the other hand, *átas* and *átra* must have their proper place somewhere in the pronominal system.

A survey of all the 61 examples for *átas* (26) and *átra* (35) in the Maitrāyaṇī Saṃhitā has led to the following result: The sentences including *átas* and *átra* often play the same role as the sentences with the ‘anamnesic’ pronoun *eṣá-/etá-*. Typically, they give the reason of a contextually evident ritual act. In many *átra* examples (26 of 35), no preceding noun is found to which the adverb could refer, and a meaning ‘in this (ritual) situation (evident from the context)’ is strongly suggested. One example of *átas* refers to something that is not explicitly mentioned by a preceding noun, but can be understood from the context. This particular usage is reminiscent of the way in which *ena-/a-* is used. This usage will be discussed as a case of ‘anaphoric-associative’ reference.

159. On the Meaning of *sam-sarj/srj* in the Vedic Literature

Sunao KASAMATSU

Little attention has been paid to the meaning of *sam-sarj/srj* when the